

日本語の自然会話における「笑い」のジェンダー対照研究

李, 雪
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494712>

出版情報 : 比較社会文化研究. 30, pp.117-124, 2011-09-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :

日本語の自然会話における「笑い」のジェンダー対照研究

リ
李

セツ
雪

1. はじめに

日常コミュニケーション場面において、笑いは多様性と随意性¹などの性格を持っており、会話や文脈の中にどの程度の効力を発揮しているかについては、捉えにくいと考えられる。このため、従来の先行研究では、心理学や医学の研究などを中心に行われていたが、実際の会話資料を用いての対人コミュニケーションに関する研究は未だに少なく、早川(1994、1999、2000、2001、2002)、桐田・遠藤(1999、2003)、久志(2008)などが挙げられる。その中、特にジェンダーの視点からの比較対照研究は稀であり、早川(1994、2002)、久志(2008)がその中心として挙げられる。笑いには、ジェンダーと丁寧さなども大きく関わることが明らかにされており、その現象にも着目する必要があると考えられる。

そこで本稿では、笑いを新たな分類基準を提示し、自然会話における女性の言語行動の特徴を明らかにすることを目的として、分析・考察を行った。

2. 先行研究

ジェンダーの視点から笑いに関する男女の比較研究については早川(2002)、久志(2008)が挙げられる。以下それらの先行研究について概観する。

早川(2002)は職場の会話データに基づき分析しているもので、笑い手、受け手相互の視点から笑いの形態、笑いの連続、あいづち笑いの性差について分析している。その結果、笑いの半数近くが聞き手の笑いであり、または笑いの半数近くが連続して出現し、「雑談場面以外」の場面で笑いが非連続である傾向が強いことが分かった。また、女性はあいづち笑いを多く使用し、特に「雑談以外」の場面で男性より聞き手の笑い＝あいづち笑いを使用して談話に参加していることを示すとしている。

久志(2008)は、日本語を母語とする大学生の会話を分析対象とし、男女の会話における笑いについて比較対照研究を行った。その結果、女性は自分で話しながら笑うか、

また聞きながら笑う傾向が強いが、男性は話しをしながら自ら笑うことが少ないことが分かった。また、男性は比較的社交上の笑いを表出することが多く、逆に女性は感情としての笑いを表出することが多いという傾向が示された。

早川(2002)、久志(2008)の男女比較に関する部分²は、何れも量的な考察のみが行われており、実際の会話の中でどこの何が違うのかについては不明瞭のままであった。また、これらの研究を含め、従来の研究で挙げられた分類基準についてもいくつかの疑問点を抱えているため、新たに分類する必要があると考えられる。

3. 研究方法とデータの収集法

本研究では、2010年4月から9月の間に、東京都と福岡市の二ヶ所³で、16人(男性7人、女性9人)の調査対象者が家族やごく親しい友人や同僚と行った自然会話を調査対象とした。7場面(女性対女性3例、男性対女性2例、男性対男性2例)で合計1時間13分2秒の談話データをICレコーダーで録音し、1561文(男性684文、女性877文)にスクリプト化した。次に、この談話資料を「性別関係」、「内外関係」、「上下関係」という三つのカテゴリーを設定して、分類した。

さらに、調査対象者の心理や発話意図を詳細に把握するために、調査協力者に対して発話した際の意図や期待した効果について事後インタビューを行った。これらの発話意図を考慮しながら、量的・質的分析を行い、男女の言語使用の特徴を記述した。

4. 笑いの機能と分類

4.1 早川(2000)による笑いの分類とその問題点

早川(2000)では笑いを以下のように分類した。

A: 仲間づくりの「笑い」= 談話促進の「笑い」

B: バランスをとるための「笑い」= 緊張緩和

C: 覆い隠すための「笑い」= 会話継続

早川(2000)の分類には以下のように2つの問題点が

残る。

第一に、久志(2008:6)にも示されたように、各分類の所轄範囲は互いに重なるところがあるため、理解や判別しづらいという点である。

第二に、相手領域に踏み込む「茶化す」の「笑い」と自ら自己領域を示す「自嘲」の笑いに触れていない点である。筆者の収録した資料においては、会話例1に見られたような「茶化す」と自嘲の笑いが多数に観察されたので、新たな分類カテゴリーが必要であると考えられる。

会話例1 兄妹は二人で高尾山に登る時の話をしている場面である。上下関係はD1 > F1

(テレビを見ながら)

F1⁴ でも、風景が全然違うものですよ、この間、私が目にしたものは(D1: {笑})。全体的に{笑いながら}、基本人だから{笑}。登りと下りの途中までに、基本人の頭だけを見てて(D1: うん)、下りの途中から自分の足元ばっか見ていたから{笑いながら}。(D1: {笑})怖くて、{笑}ど坂道を。

F1は「基本は人の頭だけを見てて」、「足元ばっか見ていた」などのように、少し誇張して自ら山を登った時の困った様子を茶化した。この自嘲気味の話で面白さを誇張し、聞き手D1の笑いを誘い、場を盛り上げる効果が見られた。

4.2久志(2008)による笑いの分類とその問題点

久志(2008)では、笑いを「A:感情表出としての笑い」と「B:社交上の笑い」の二つ大別して分析している。

- | | |
|--------------|----------------------------|
| A)感情表出としての笑い | B)社交上の笑い |
| A-1面白いから笑う | B-1場面や話を盛り上げるために笑う |
| A-2恥ずかしくて笑う | B-2話・発話の内容を和らげるために笑う |
| A-3嬉しくなって笑う | B-3感情や自分の意見、場面などをごまかすために笑う |
| A-4驚いて瞬間的に笑う | B-4同意、納得、共感 |

などを示すために笑う

久志(2008)には以下のように、二つの問題点が残る。

第一に、筆者の採録した発話資料には、久志(2008)の分類ではどちらにも当てはまらない発話例が多数見られた点である。

会話例2 40代の友達同士が居酒屋での雑談場面である。上下関係はD2 > D1

D2 あら、なんとか黒字に収めてならないですか? ↑
 D1 うん、それで、まず予算を何としても達成しろということと、後は、中国はどうだということ。
 台数だけは何とかなると思いますといったら、駄目だ、上積みしろ。{笑}
 D2 え? ↑
 D1 上積み。
 D2 {笑}今度、中国、中国に頼るじゃないかということかな。

D1の社長からの指示「上積みしろ」を復唱する際に現れた「苦笑い」に対して、D2はあいづち代わりに「笑い」で反応した。ここの笑いはD1の複雑な気持ちに付き添って、相手の気持ちを理解しているというように、ただのあいづちより深い意味が伝わるができる。

このような久志(2008)に触れられていない「苦笑い」と「反応としての笑い」は、筆者の採録した会話資料からいくつか見られた。

第二に、久志(2008)では、「感情表出としての笑い」と「社交上の笑い」の繋がりが提示されていないという点である。各分類は同じ水準にあるとは考えられず、たとえば、「面白いから笑う」と比べ、「恥ずかしいから笑う」は「社交上の笑い」に近いと考えられ、同意の笑いより「盛り上げるために笑う」のほうが一般に感情的である。このため、本稿では程度差を示して分類を行う。

4.3本稿の提示する笑いの分類

本稿は久志(2008)の分類を主に参考とし、筆者の採録会話資料を踏まえ、笑いの機能を以下のように分類した。

表1 本稿の提示する笑いの分類

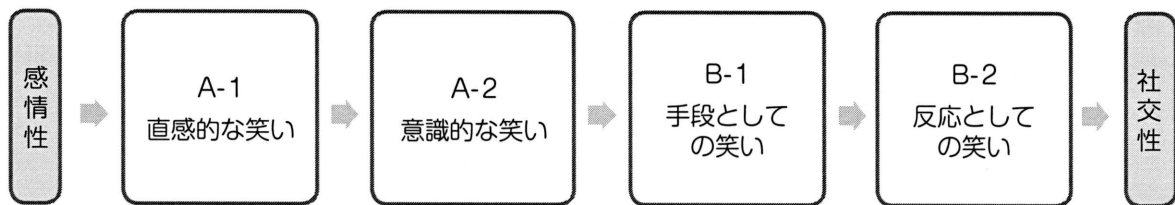
感情表出の笑い	A-1直感的な笑い	A-1-a面白い
		A-1-b嬉しい
		A-1-c可笑しい ⁵
	A-2意識的な笑い	A-2-a驚いて
		A-2-b恥・照れ ⁶
		A-2-d苦笑い

B 社交上の笑い	B-1 手段としての笑い	B-1-a 場や話しを盛りあげる
		B-1-b 話、発言の内容を和らげる ⁷
		B-1-c 感情や自分の意見をごまかす
		B-1-d 他人や自分のことを茶化す ⁸
	B-2 反応としての笑い	B-2-a 同意、納得、共感などを示す
		B-2-b 相手の笑いや話しのお付き合い ⁹

以上の分類は、上から下に行くほど感情的な笑いから離れ、手段や社会機能という意味が強まっていく。つまり、図1に示したように、「直感的な笑い」が一番感情性が強

く、「反応としての笑い」は最も社会的意味が強いと考えられる。

図1 笑いの程度差



5. 調査結果

表2 笑いの分類及び性差

カテゴリー			総数	女性	比率	男性	比率
A 感情表出の笑い	A-1 直感的	A-1-a 面白い	119	84	71%	35	29%
		A-1-b 嬉しい	1	1	100%	0	0%
		A-1-c 可笑しい	5	4	80%	1	20%
	A-2 意識的	A-2-a 驚いて	2	2	100%	0	0%
		A-2-b 恥・照れ	15	15	100%	0	0%
		A-2-c 苦笑い	7	0	0%	7	100%
合計			149	106	71%	43	29%
B 社交上の笑い	B-1 手段として	B-1-a 盛りあげる	56	37	66%	19	34%
		B-1-b 和らげる	21	14	67%	7	33%
		B-1-c ごまかす	8	5	63%	3	38%
		B-1-d 茶化す	21	17	81%	4	19%
	B-2 反応として	B-2-a 同意	10	3	30%	7	70%
		B-2-b お付き合い	19	6	32%	13	68%
合計			135	82	61%	53	39%
総合			284	188	66%	96	34%

「感情表出の笑い」に着目すると(表2に参照)、女性は105の笑い例が見られ、男性の43例より2倍ほど高い。男性より女性のほうが多く笑っていることが明らかになった。具体的に、女性は「面白いから笑う」が84例、総数の71%であり、男性の35例よりかなり多い傾向が見られた。また、「恥・照れ」による笑いは女性には15例あるのに対して、男性には一例も見られなかった。それに対して、「苦笑い」による笑いについて、男性には7例の発話が見られ、女性には見られなかった。女性はより感情の程度が高い笑いが多用されていることに対して、男性の笑いはより「社会的」に近いと言えよう。

また、「社交上の笑い」については、女性は82例で男性より多用していることが分かった。具体的に、女性は「盛り上げる」ための笑いが37例で、男性より倍以上多い。「茶化す」による笑いの使用は17例見られ、男性の4例より、4倍以上多い。これに対して、男性は「同意を示す」笑い(7例、70%)と「お付き合いの笑い」(13例、68%)をより多く使用している傾向が見られた。

「反応の笑い」が多用されていることから、女性より男性のほうがより社交性の程度が高いということが分かった。

さらに、表3に示すように、女性は話し手としての笑い及び「笑いながら」の発話が多いが、男性は聞き手としての笑いが多い傾向が見られた。

表3 笑いの場面差

カテゴリー	男性	比率	女性	比率	総数
話し手としての笑い	38	28%	99	72%	137
聞き手としての笑い	58	39%	89	61%	147
話しながらの笑い	28	41%	40	59%	68

6. 笑いの性差はどのようなところにあるのか?

6.1「照れ・恥」と「茶化す」を多用する女性の発話

前述したように、男性と比べ、女性は「恥・照れにより笑う」の比率が高いということが分かった。以下で、その「恥・照れ」による笑いの談話例を見てみる。

会話例3 20代の女性3人(同僚)が下着についての雑談場面。上下関係はF1>F2>F3

F1 何?↑
F3 ずれている。{笑}よし、これはずれていた、私の。(F2:うん?↑)ブラジャー。{笑}

F1 乳↑(F2:うん。)
F3 こんな{笑いながら}とられて。
F2 乳ずれたってよ。(名前)ちゃん。(F1:乳ずれ。)また、ずれるって。(F3:{笑}。)

F3はブラジャーがずれていることを告げながら、恥ずかしいから二回笑った。その後、F1から「乳↑」のようなあまりにも直接的な問いに対して、F3は通常の話しぶりと違って、小さい声で笑いを伴いながら、恥ずかしさを表した。最後に、「また、ずれるって」と、他人から茶化されることに対して、恥ずかしさをごまかそうとする意味も含めて照れるように笑った。F3の笑いが「恥ずかしいよ」というようなメッセージを相手に伝え、茶化されないように自分を防御する効果があると考えられる。この4回の笑いはF3が自らのフェイス(Face)を守るためのストラテジーだろう。

会話例3のような「恥・照れ」による笑いは男性話者の発話には一例も見られなかった。今回の談話データでは、男性話者同士が恥ずかしい内容や、照れやすい話題に殆ど触れていないのも原因の一つだろう。

「恥・照れ」による笑いと同様に「茶化す」による笑いも女性の会話から多数に観察されており、以下にその例を見てみる。

会話例4 家族同士の雑談で、F1はD1の飲み過ぎを茶化している。上下関係はF2>D1>F1。

F1 あんた、筍煮たかったけど、今、胃がちよつと具合悪いから。(D1:うん)
筍、消化に悪すぎて{笑いながら}。
D1 先週はもう、本当、お腹はすいているんだけど、ここはもう焼けちゃって、食べられないや。
F1 バターを舐めなきや。
F2 どうしたの、↑胃が出すぎちゃったの↑、胃酸が。
F1 アルコールで焼けたんだって{笑いながら}。

F1は筍のことにかこつけて、冗談半分でD1の飲み過ぎを茶化している。最後にも、F2の質問に対して、F1は「アルコールで焼けたんだって」と笑いながら答え、再度D1を茶化している。F1は一連の「茶化す」発話を通して、この場を盛りあげているものと思われる。

会話例5 家族同士の雑談場面で、F1が知り合いの人が卵を殻ごと食べることを茶化しながら、話している場面である。上下関係はF2>D1>F1である。

F1 私の知り合いのおばさんはさ、御昼過ぎでラー

メンを作ってさ、前の会社の時、食べて、で、その入れようとして、具にしようとして、ゆで卵を家から持って来て、上に卵浮かして、頂きます、と食べた瞬間に、卵を食べようとしたとき、カツンって。{笑}(D1:{大笑い})

F2 あ、見てなかった。

F1 あら、殻ごとだったわ {笑いながら}。(D1:{笑})何ぼけているんだ、自分で、じぶんで卵を持って来たさ {笑いながら}。ゆで卵剥くの忘れていたわ、(D1:{笑})殻は白いから剥いてあると思っていたとかと言ったの。(名前2)さん、シール、シール貼ってありますよ {笑いながら}。(D1:{笑})あーら、気が付かなかった。(名前3)さんが、っていうか、シール。{笑}

D1 あれは、もう天然ボケの人ですね。

ここでは、F1は知り合いのうっかりした行為に「あら、殻ごとだったわ」のような女性語スタイルを使用し、面白おかしく表現している。おばさんを茶化しているような笑いを通して、聞き手D1の笑いを誘っている。その後、すぐ自分の立場に戻り、「何惚けているんだ」「自分で、じぶんで」のような批判の口ぶりで「茶化す」を続けた。そして、笑いながらも一度知り合いの真似をして、「シール。シール貼ってありますよ」と、他人の視点からその人の滑稽性を伝えた。このF1は一連の「茶化す」の発話を通して、場を盛り上げており、D1の笑いを上手に誘った。

6.2「苦笑い」や「付き合い笑い」が特徴となる男性の発話

女性が場を盛り上げようと積極的に笑うのと対照的に、男性は「苦笑い」「相手の笑いや話に付き合う笑い」など、より社交性の高い笑いを使用している。具体例を見てみよう。

会話例6 40代の友達同士が居酒屋での雑談場面で、D1は中国の工場管理について話している場面である。D2はやや上の立場にある。

D2 中国人の親分をしっかりと自分の部下に、見方さえ違うんだ。

D1 そう、だから、前は居たんですよ、ぼくの時は。(D2:ああ)

あの、生意気なんだけど、(D2:うん)で、もう、しょっちゅう悪口は言うし、ぼくが命令しても、いやそれだけは聞けないって言って{笑いながら}(D2:{笑})断るし。(後略)

ここでは、D1は中国にある工場の管理者が「僕命令しても、…断るし」と、管理者に服従すべきという日本

の考え方と違い、自分の命令を聞かないことに対して、「苦笑い」した。管理者D1の気まずさが「苦笑い」を通して、よく表されている。さらに、このような日中の間に存在している文化のギャップに対する仕方ないという気持ちも含まれていると言えよう。

会話例7 40代の友達同士が居酒屋での雑談場面で、会社の上司に頻繁に出張させられたことに対して、D1が愚痴を言っている場面である。上下関係はD2>D1

D1 今日も(名前5)さんと(名前9)さんが、早く行け。早く行け↑この前行ったでしょう?↑
{笑}

D2 うーん、七月だったらば、もしかすると、(地名4)に行くことも考えられるわけ?↑

D1 そうだね。

「早く行け。早く行け↑この前行ったでしょう?↑」というような上司に対して文句があるとしても、行くしかないというような社会人としての辛さがこの苦笑いに含まれた。ただの愚痴より苦笑いがD1の心境が意味深く伝えていくと考えられる。

会話例8 40代の友達同士が居酒屋で人事異動の話をしている場面。上下関係はD2>D1。

D2 で、それだけ中国に期待寄せられるなら、D1さんは今度の人事で、役員に帰りたいな。

D1 {笑}、もうもう。

D2 それは認めてくれないわけ。↑

D1 うん、あの、そうですね。

「役員で帰りたい」というD2の指摘に対して、D1は笑いで答えることで、一度左遷された複雑な立場にある自分の面子を守り、内面の悔しさなどを見透かされるのを防いでいると考えられる。次の例でも、相手への反応として笑いをういている。

このような「反応としての笑い」が多用されることは、他の男性の発話にも見られた。

会話例9 テレビで放送されたグルメ番組に出たラーメンについて、兄弟2人D1とF1が話している場面である。上下関係はD1>F1である。

F1 天狗、なに?↑え、なにあれ。

D1 ラーメンだって。

F1 ラーメン、↑冷やし中華に見えた。

そんな良いもの、ひと、ひと、一目もどいうか。
{笑いながら}

D1 {笑}

ここでは、F1は笑いでラーメンの話を持ち上げようとしている。D1はF1のこの意図を受け取って、合わ

せて笑っていた。この「笑い」はF1の笑いに対するただのお付き合いであり、会話進行の合図だと考えられる。D1のこの笑いはいづちよりF1の話と一体となり、さらに場の雰囲気を保つことができる。

会話例10 40代の友達同士が居酒屋での雑談場面である。社長のやり方に愚痴を言っているD1に対して、D2が共感の笑いを示した。上下関係はD2>D1

D1 (前略) じゃ、その200台を、海外の200台をどうやっていくかという、(地名4)の製品だったら(D2:うん)それは売れると。{笑いながら}

待ってよ、そんな注文来ちゃたら、作れないよね。{笑いながら}

D2 {笑} あ、前聞いた話の中で、中国、中国製は駄目(D1:うん)だという話があったんじゃないですか?↑だから、結局(工場名1)に戻さなきゃいけないから。

D1が苦笑いしながらの発話の中に、社長が現場の状況を把握していないことに対して文句を示し、「それは売れると」、「そんなに注文がきたら、作れないよね」と、D2の発話を誘っていた。D2は「同意や共感」を示すあいづちの代わりに、「笑い」を通してD1の発話内容に共感を示した。この「笑い」はD1の苦笑いとペアになっており、社会人同士として共通である考えや辛さに対して「言えないが、よく分かっているよ」と言うように、あいづちよりさらに深い意味が含まれている。

7. まとめと考察

本稿では、実際の会話例を対象に、「笑い」視点から量的・質的な分析を行い、女性と男性の会話には種々の違いがあることを観察した。分類別に笑いにおける男女差を考察したところ、女性は男性より多く笑っていることが明らかになった。

具体的に、女性は話し手として、より感情性の高い笑いを多用していることが明らかになった。「面白い」や「恥・照れ」、または「盛りあげる」、「和らげる」、「茶化す」のような笑いを多用し、積極的に場を盛り上げ、場の雰囲気を調整しようとする意識が強いということが明らかになった。一方、男性は聞き手として、より社交性の高い笑いが多く使われていることが改めて証明された。感情性の度合いの低い笑いやあいづちに近い笑いを使用することはより冷静に聞こえることから、従来の男に対する社会的規範が作用しているのかもしれない。

女性は女性語だけではなく、笑いなどの手段を通じて、話し相手に対する配慮を表したり、親密さを示したりしていることが明らかになった。女性は男性と比べてよりポジティブで調和的であり、場面の雰囲気や相手との関係を考慮しながら、ストラテジーを上手に使用することができる。場の雰囲気を盛り上げ、相手への配慮を示すなどのことを通じて、相手との心理距離を縮め、丁寧にコミュニケーションをすることが出来ると考えられる。

8. おわりに

今回の研究では、男性の笑いと女性の笑いに様々な点で違いが見られ、先行研究での指摘と重なる事実も多かったが、本稿で観察された傾向がすべての年齢層に当て嵌まるか否か、普遍性があるか否かを確かめるには、今後より幅広く多数のデータを収集し、考察することが必要である。更に、将来は中国語母語話者の会話との比較対照を加え、異文化間教育における教材開発に役立てたい。

註

1. 早川(2002:150)では、笑いは相互性、同時性、随意性があると指摘された。
2. 久志(2008)48頁から53頁までの第4章で、会話における笑いの男女比較を行われた。
3. 今回の調査対象者は主に東京都と九州地方の出身であるため、発話の癖や方言などの要素を排除することは困難だと考えられる。
4. 本稿では男性調査対象者をD、女性対象者をFで表記した。
5. 本稿では、「可笑しい」の「変だ、変っている」という意味を取ることにする。
6. 本稿では、「A-2-b恥・照れ」に照れによる笑いを加えたが、明らかに感情や意見をごまかそうとする照れ笑いは「B-1-c感情や自分の意見をごまかす」に含める。
7. 「自らのフェイスを脅かす恐れがある謝罪による笑い」と「緊張感を緩和する笑い」、「気まずい場面を緩和し、雰囲気を和ませる笑い」も「B-1-b和らげる」に含める。
8. 自嘲による笑いも「B-1-D茶化す」に含める。
9. 「相手の笑いや話しのお付き合い」とは、聞き手が談話進行を主な目的として、相手の笑いや話に対して

反応を示す笑いである。

参考文献

- Brown, P. & S, C, Levinson (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage Cambridge : Cambridge University Press
- 北垣郁雄. (2005). 笑いとおかしみの要因的体系化について. 笑い学研究 (第12号), 40-47.
- 桐田隆博・遠藤光男. (1999). 会話における笑いの表出機能 : laugh-speakに着目して. 電子情報通信学会技術研究報告書, 第99巻, 1-7.
- 桐田隆博・遠藤光男. (2003). 面接場面での笑い : 笑いながら話す現象 (laugh-speak) とその機能. 電子情報通信学会技術研究報告書, 第102巻, 13-18.
- 桐田隆博. (2005). 人が笑いながら話すとき—認知心理学的アプローチ—. 基礎心理学研究, 第23巻 (第2号), 207-212.
- 早川治子. (1994). 日本人の「笑い」の談話機能. 言語と文化 (第7号), 99-110.
- 早川治子. (1999). 「笑い」の意図と談話展開機能. 現代日本語研究会, 女性のことば・職場編, 175-196. ひつじ書房.
- 早川治子. (2000). 相互行為としての「笑い」. 文学部紀要, 第14巻 (第1号), 23-43.
- 早川治子. (2001). 「笑い」の分類に基づく数量的分析. 文学部紀要, 第14巻 (第2号), 1-24.
- 早川治子. (2002). 自然言語データの相互的視点による「笑い」の分析. 男性のことば・職場編, 149-165. ひつじ書房.
- 久志唯 (2008) 日本語母語話者の会話における笑いの機能について—大学生の二者会話に着目して—修士論文
九州大学大学院比較社会文化学府
- 松村瑞子. (1999). 日本語会話におけるポライトネス—Brown & Levinson (1987) の妥当性を中心に—. 言語科学, 第34巻, 51-60.
- 松村瑞子 (2001) 日本語の会話に見られる男女差 比較社会文化69-75 九州大学大学院比較社会文化学府
- メイナード・K・泉子. (1993). 会話分析. くろしお出版.

Laughter in Japanese Conversation- : A Contrastive Analysis between Men and Women

Li Xue

This study is an analysis of Japanese conversational data with a focus on the act of laughter. The results show that women laugh more in general, typically using emotional laughter when acting as speakers. Men, on the other hand, tended to laugh more when acting as listeners, employing social laughter at those times, which is consistent with previous findings. Women in the study actively used laughter to improve the atmosphere and decrease the psychological distance between the persons involved, thus maintaining “harmony” in the conversation.